俳句の中の夢（一）

池田亮二

ＡＩとやらが、人の考える領域に侵入してきて、今では詩や小説まで人に代って作ってくれるようになったとか。人間の居場所はだんだん狭くなってきました。人はどこに居場所を見つければよいのか。そこで思いついたのが夢の世界です。

ＡＩは、多分夢を見ないだろう。いや見ることができないだろう。夢は論理を超越した超現実の多次元の世界なのだから。

人間は夢を見ることができる。それなのに日本人の平均睡眠時間は七時間二十二分とかで世界最低レベルといいます。せっかくの夢見る特技があるのにこれでは夢を見るひまもない。

かつて日の出とともに起き日没とともに寝た時代には、眠る時間はたっぷりあって、夢の世界もそれだけ広かったし、夢は精神世界の一角をも占めていたようです。現代人も昼間のわずらわしさはＡＩに任せて、眠りを取り戻し、せめて異次元の夢の世界に遊んでみたらどうでしょう。

かつて人は夢とどう付き合ってきたか、それが俳句の中でどう詠まれてきたか。夢の世界の俳句を探ってみました。

夢の中にも花は咲き、鳥は舞っていますから、俳句も生まれるでしょう。ただ、夢は現実と次元が違って空間が歪んだり時間が伸びたり縮んだり逆転したり、得体の知れぬ怪物が現われたりの奇妙な展開をします。そんな異次元の世界で俳人たちはどのように遊んでいたのでしょう。

まずは、わかりやすい句から、

切(きら)れたる夢は誠か蚤の跡　　其角

よく知られた句ですから小学生でもわかります。いわれもなく誰かに斬りつ

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

けられたと思ったら目が覚めて、蚤に食われていた。夢の世界では蚤の正体はとんでもない怪物で、人間に恨みをもっていたか、蚤からすれば日頃、無残にひねりつぶされていることへの敵討ちでしょうか。蚤の執念恐るべし。

涼しいか寝てつむり剃(そる)ゆめ心　　其角

坊さんが小僧に頭（つむり）を剃ってもらいながら、うつらうつらしている。頭がつるつるになるほど、さぞ涼しくなることだろう、という何でもない日常を詠んだだけだけど、妙におかしみがある。和剃刀でぞりぞり剃るのがよく、電気カミソリでガーガーでは風情もなくなる。こんな句ならおれだって作れると髪結い床のおやじにも思わせるかもしれないが。師の芭蕉は「かれは定家の卿なり、さしてもなきことをことごとしくいいつらね…」と妙な言い方で其角の無邪気で飄逸なところをほめています。

同じようなナンセンスな夢の句があります。

又嬉しけふの寝覚ははつ鰹　　暁臺

うたゝねのゆめにみへたる鰹哉　　其角

蕉門の立派な俳人も、こうした子どもじみた句をも楽しんでいたようです。江戸っ子は女房を質においてでも初鰹を食いたいと願っていた。蕉翁によるとこういう夢を念夢というらしい。この言葉、手近の辞書には見当りませんが。ちなみに芭蕉は、夢で夭折した門人の杜国と再会し、覚めて涙を流しています（『嵯峨日記』）。食い意地のはった其角とは、念夢もまた違うようです。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。